

シンポジウム「東アジアにおける交流と変容」要旨

礪波, 護
大谷大学

牟, 発松
華東師範大学

川本, 芳昭
九州大学

韓, 昇
復旦大学

他

<https://doi.org/10.15017/25826>

出版情報：九州大学東洋史論集. 33, pp.1-25, 2005-05-30. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：



九州大学では現在、21世紀COEプログラム（人文科学）-採択題目-「東アジアと日本：交流と変容」が稼働中である。その一環として下記スケジュールで国際シンポジウム「東アジアにおける交流と変容」が開催された。

・・
 日程 2004年9月11日（土）・12日（日）

会場 福岡国際会議場（福岡市博多区石城町2-1）

第1日（9月11日）第1部 講演

午後2:00

2:10～3:10「遣隋使と遣唐使」

磯波 護（大谷大学教授・京都大学名誉教授）

3:30～4:30「漢唐間の東アジア世界における中日関係とその変遷」

牟 發松（華東師範大学教授）

第2日（9月12日）第2部 シンポジウム

午前10:00～12:00 第1セッション「古代東アジア世界の交流と変容」

「魏晉南北朝時代における世界秩序の変動と古代日本」

川本芳昭（九州大学）

「日本と白村江の戦いー政治決定と軍事行動ー」

韓 昇（復旦大学）

「東アジアにおける律令施行域と冊封関係ー亀趺碑を題材としてー」

平勢隆郎（東京大学）

午後1:00～3:00 第2セッション「朝鮮の文化世界ー交流と変容の精華ー」

「韓国古代の犠牲礼と伝統」 辛 鍾遠（韓国精神文化研究院）

「東洋の宇宙論ー龍の造形と象徴ー」 姜 友邦（梨花女子大学）

午後3:15～5:15

第3セッション「元朝をめぐる東アジア世界の交流と変容」

「高麗王家と大元ウルス」 森平雅彦（九州大学）

「日元関係と博多」 佐伯弘次（九州大学）

「大元の記憶」 森川哲雄（九州大学）

・・

以下に、その際の公開講演、および第1セッションでの報告要旨を掲載する。

遣隋使と遣唐使

礪波護

はじめに

ご紹介いただきました礪波護です。今から四十数年前に京都大学で東洋史を専攻し、卒業論文と修士論文のテーマを、唐代から五代にかけての律令体制の崩壊期を対象に選び、財政機構と律令体制の変貌の諸相、使職すなわち令外の官の出現過程を跡付けました際、渉猟しました先学の研究論著のなかで最も有益であったのは、九州大学教授であった日野開三郎先生の業績でした。当時、日野先生の論著に蠅螂の斧を振り上げたのですが、先生はこの若造の論文に対して、懇切な教示を惜しまれませんでした。今回、九州大学21世紀COEプログラム〈東アジアと日本…交流と変容〉の一環としての国際シンポジウムでの講演を川本芳昭教授からお電話で依頼されました時、頭に浮かびましたのは日野先生への恩返しということで、たいへん光栄なこととして、快諾させていただいたのです。

二日間にわたる国際シンポジウム〈東アジアにおける交流と変容〉の初日に、旧知の牟發松教授とともに、太宰府ゆかりの当地、ここ福岡国際会議場で遣隋使と遣唐使について講演する機会を与えられたわけですが、ほぼ四半世紀前、文化大革命が終わり、発足したばかりの唐史学会の会長である武漢大学の唐長孺先生が、京都大学人文科学研究所に、初めての外国人客員教授として、四ヶ月間滞在された際、万般のお世話をさせていただいたのが私ですが、牟發松教授は高先生の高弟の一人という因縁です。

本論に入りまして、お手元の「要旨」に沿って、お話させていただきます。

『死者の書』が描く太宰府

拙著『隋唐帝国と古代朝鮮』（〈世界の歴史6〉中央公論社、一九九七年刊）の第1章第3節「日本人が憧れた晋唐の文化」の『死者の書』が描く大伴家持の関心〉の項で、国文学者で歌人の折口信夫が釈迦空のペンネーム

で書いた、私の愛読書たる『死者の書』の所説を紹介し、七五九年春の彼岸の頃、主人公である南家の郎女が、父からの心づくしの贈り物の中で、いちばん嬉しかったのは、唐の玄奘が永徽元年、西暦六五〇年に訳した『称讃浄土仏摂受経』一卷、つまり新訳の『阿弥陀経』であったことを特筆しました。その折に文脈の上から書き漏らさざるをえなかったのが、

国の版図の上では、東に偏り過ぎた山国の首都よりも、太宰府は、遙かに開けてゐた。大陸から渡る新しい文物は、皆一度は、この遠の宮廷領を通過するのであつた。唐から渡つた書物などで、太宰府ぎりに、都まで出て来ないものが、なかなか多かつた。

学問や、芸術の味を知り初めた志の深い人たちは、だから、大唐までは望まれぬこと、せめて太宰府へだけはと、筑紫下りを念願するほどであつた。

という文章です。小説の世界とはいえ、折口が極めて重視した太宰府ゆかりの当地で、遣隋使と遣唐使について講演するのは、私にとって殊のほか嬉しいことなのです。実は決定版〈折口信夫全集〉巻13巻の月報に『死者の書』と「身毒丸」と題する文章を寄稿した機縁で、五年前に中公文庫版の『死者の書』の改版に当たり、「身毒丸」を追加して『死者の書

身毒丸』と改題し、表紙カバーを何にするかについての相談を受け、入江泰吉撮影の「大津皇子の眠る二上山」は如何ですか、という私の提案が採択されたのでした。

倭の五王による使節派遣の時期には、倭国が南朝の宋による、冊封体制の中に組み入れられていましたが、使節派遣の記録が残っていない南北朝後半の一二〇年の空白をへて、遣隋使と遣唐使が活躍した時期には、倭国とそれを改称した日本国は、冊封体制の中に組み入れられていなかった史実に、注意を喚起しておきたいと思います。

海西の菩薩天子は隋文帝を指す

拙著『隋唐の仏教と国家』（中公文庫、一九九九年刊）に再録した「隋唐時代の中国と日本の文化」でも述べたように、隋の文帝楊堅は、北周の武帝によって断行された仏教と道教に対する禁圧を撤回し、無宗教政治の下に潜伏していた人びとの不満を解消しました。その文帝が中国全土を再統一した開皇二十年、西暦六〇〇年に倭王が使者を派遣して、長安の宮廷に到着したという記事が、『隋書』倭国伝に見えます。日本側の『日本書紀』などには記録はありません。数年後に、冠位十二階の制定などの国内改革をなしとげた聖徳太子は、小野妹子らを隋に派遣しました。遣隋使の小野妹子らは大業四年、六〇八年三月に、時あたかも洛陽に滞在していた煬帝

に謁見しました。『隋書』倭国伝には、まず倭の使者が

聞くならく、海西の菩薩天子、仏法を重ねて興す、と。故に遣わして
朝拝せしめ、兼ねて沙門数十人、来りて仏法を学ばしむ。

と述べ、次ぎに国書が「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。
恙なきや」という文言で始まっていて、煬帝が不快感を表した、と記録し
ています。鹿児島大学におられた増村宏ほか多くの先学が論及されていま
すが、何に対して不快感なのかははっきりしません。

海西の菩薩天子とは、仏教の復興に尽力した隋の文帝(在位五八一～六
〇四年)を指します。その仏教を極めて重視する統治策を朝鮮半島を通じ
て知った聖徳太子が、大いに憧れ、統治策を学ぶために遣隋使を送るに際
して、数十人の仏教僧たちを同行させ、本場の仏教事情を視察させようと
したのであって、文帝がすでに数年前に没して、次男の煬帝が即位したニ
ュースは伝えられていなかったのです。あるいは父の文帝と間違えられた
ことに対する不快感が根底にあったのかも知れません。

小野妹子は、隋使の裴世清と随員十二人を伴ってここ筑紫に帰着しまし
た。裴世清が一緒だとの思いがけない朗報をきき、慌てて難波津におかれ
た迎賓館のひとつ高麗館の近くに、新しい館を建造しました。難波から、
出迎えをうけて飛鳥の海石榴市に到着します。海石榴市は大和川の上流、
山の辺の道の南端、現在の奈良県桜井市にありました。日本最古の市が開
かれ、また求婚の場として歌垣が行われた地で知られ、跡地には『万葉集』
の問答歌「紫は灰指すものぞ海石榴市の八十のちまたに逢へる児や誰」を
今東光が揮毫した小さな石碑が据えられています。それはさておきまして
『隋書』倭国伝には、朝廷で裴世清を謁見した倭王が大いに悦んで述べた
言葉として、

我れ聞くならく、海西に大隋礼義の国ありと。故に遣わして朝貢せし
む。我れは夷人、海隅に僻在して、礼義を聞かず。ここを以て境内に
稽留し、即ち相見え。今故らに道を清め館を飾り、以て大使を待つ。

冀くは大国維新の化を聞かんことを。

と記録しています。隋の皇帝が、仏法を重ねて復興した菩薩天子の文帝で
はなく、仏教にやや冷淡な煬帝であると知った以上、外交辞令を「我れ聞
くならく、海西に大隋礼義の国ありと。故に遣わして朝貢せしむ」と改変
したのは当然の配慮だったのです。

ところが、二〇〇一年十一月に、NHKのテレビ番組として歴史ドキュメ
ント《隠された聖徳太子の世界～復元・幻の「天寿国」》が放映され、翌
年二月に大橋一章・谷口雅一共著『隠された聖徳太子の世界—復元・幻の
天寿国』(NHK出版、二〇〇二年刊)が刊行され、聖徳太子が憧れた中国の

菩薩天子は隋の煬帝であって、「文帝が篤い仏教信者だったことは確かだが、煬帝はそれ以上に篤い信者だった」という説が喧伝されました。

しかし、隋唐初の法琳撰『辨正論』巻三の、隋の仏教に関する統計記事によっても、このような説は成り立ちません。夙に塚本善隆が明快に指摘したごとく、隋書倭国伝の「聞海西菩薩天子、重興仏法」と密接に関連する文言が、仁寿と改元した六〇一年の六月十三日、文帝還暦の誕生日の当日に出された詔勅の冒頭に「朕帰依三宝、重興聖教」とあり、「重興仏法」は文帝一代の治世そのものをさす言辞であって、文帝の詔勅などの文中に、しばしば見られますし、王劭述『隋祖起居注』に、智仙尼により般若尼寺で養育された帝が、後に果たして山東より入りて天子となり、「仏法を重ねて興す。みな尼の言のごとし」とあるのです。隋の文帝の誕生説話は史実ではない、と言う説もありますが、今回のシンポジウムに参加されている韓昇教授は、著書『隋文帝伝』（一九九八年、人民出版社刊）の第二章第一節「“那羅延”的誕生」で、ほぼ事実である、と論じています。

遣唐使が将来した文化と将来しなかった文化

隋使の裴世清らの帰国に際し、小野妹子を大使として隋に派遣するとともに、学生として福因や高向玄理、学問僧として日文や南淵請安ら合わせて八人を随伴させました。日文は帰国後は僧旻と称しました。十年後の六一八年に、隋王朝が滅亡して唐王朝が成立すると、遣隋留学生は、自動的に遣唐留学生となってしまいました。かれらの留学期間は二四年とか三二年という長期に亘りました。長安の地で唐初の律令体制が整備されていく雰囲気を経験した留学生たちは、帰国するや、唐の政治体制に関する知識を中大兄皇子や中臣鎌足に伝授しました。中大兄と鎌足が六四五年に〈大化改新〉の新政府を樹立するに当たって、帰国した留学生たちが、重要な役回りを演じるのです。

政府から任命されて二船あるいは四船からなる船団をくみ、唐王朝に公式に派遣された遣唐使は、六三〇年に出発の第一回から、八三九年に入唐の最後の第十七回まで二百余年に亘り、八九四年の菅原道真による中止をもとめた上表以後、再び任命されませんでした。この機会に遣唐使の歴史を振り返り、特記すべき話柄を挙げておきます。

七〇二年に長安に到着し、「倭国の使」ではなく、初めて「日本国の使」を名乗った粟田真人は、中国の古典をよく理解できるのみならず、立ち居ふるまいが温雅だということで、評判となりました。その一行に遣唐少録と

して加わった山上憶良は、唐の地で、「いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ」という短歌を作りました。この短歌について、吉田孝さんは、『日本の誕生』（岩波新書、一九九七年刊）で、『日本古典文学大系・万葉集』が「日本」を「大和」と書き直しているのを非難しています。なお粟田真人や山上憶良が到着した七〇二年は、則天武后によって唐王朝が乗っ取られて、周王朝が支配していた時期ですから、正確には遣唐使ではなくて、遣周使というべきかも知れません。当時の日本の都は飛鳥ではなくて藤原京でした。今朝の各種の新聞に大きく掲載されていますように、藤原京の北の京極が発見され、藤原京の範囲が二十五万平方キロであることが確定したそうです。古代最大の都であり、宮城が隋や唐の都である長安や洛陽のような都の北端ではなく、中央部に位置していたことになります。

玄宗治世の開元五（七一七）年、留学生の吉備真備や阿倍仲麻呂を随員に加えた遣唐使は、外交を担当する鴻臚寺で儒教を学び、のちに大量の書籍を買って持ち帰ったことが、唐で話題になりました。鴻臚という言葉、こちらでは珍しくないのですね。今朝地下鉄の駅で、来週末には鴻臚館跡の特設ステージで、野村万之丞のプロデュースによる「はかた楽劇 鴻臚館物語」が行われるというポスターを見ました。

この遣唐使一行が道教に熱を入れる玄宗に配慮してでしょう、孔子廟堂と寺観、すなわち仏寺と道観への礼拝を願った記録「鴻臚寺奏。日本国使請。謁孔子廟堂。礼拝寺観。従之」が、『冊府元龜』の卷一七〇〈帝王部来遠〉と卷九七四〈外臣部褒異〉の開元五年十月乙酉の条に残されています。

今回の総合課題〈東アジアにおける交流と変容〉を〈遣唐使が将来した文化と将来しなかった文化〉に置き換えてみます。将来した文化・文物としては、大量の仏像・仏典をはじめ、山上憶良が持ち帰った性愛小説『遊仙窟』や、吉備真備の将来品『唐礼』・『東漢観記』・楽器・書跡など、枚挙に暇はありません。しかし将来しなかった文化・文物として、第一に挙げるべきなのは、仏教に刺激をうけて隋唐時代に盛んとなっていた道教を意図的に拒絶した史実です。『唐大和上東征伝』やそれに依拠した井上靖の『天平の甕』が述べているように、伝戒の師として鑑真を招聘する許可を求めた際、玄宗は鑑真とともに道士を連れていくように命じましたが、婉曲に断り、一行中から春桃源ら四人を唐に留めて、道士の法を学ばせることにしました。のちに春桃源らが帰国したという記録はなく、おそらく唐土に骨を埋めたのでしょう。

また将来しなかったと言うよりも、将来できなかった文物・書物もあり

ます。浙江大学日本文化研究所所長の王勇教授が提唱しているように（共編著『奈良・平安期の日中文化交流—ブックロードの視点から』農山漁村文化協会、二〇〇一年刊。また王勇教授特別講演会記録集『ブックロード—書物による文明の伝播・変容・成熟』農山漁村文化協会、二〇〇二年刊）、日本と中国の文化交流は〈ブックロード〉と呼ぶのが適当なのですが、最後の遣唐使船に円仁と一緒に入唐した円載、かれについては宮崎市定『日出づる国と日暮るる処』（星野書店、一九四三年刊。のち中公文庫、一九九七年刊）所収の「留東外史」と佐伯有清『悲運の遣唐使—円載の数奇な生涯』（吉川弘文館、一九九九年刊）が詳しいのですが、この円載は唐の女性と結婚し、在留四十年ののち、八七七年に数千巻にのぼる典籍をたずさえて、唐の商人李延孝の船に乗って帰国する途中、大暴風雨に遭い、経巻とともに海の藻屑となりました。若しこれらの仏典が無事に将来されていたら、或いは日本の仏教界はかなりの変容をうけたかも知れないのです。

そして道教ではなく仏教であっても、数年前に講談社刊の『日本の歴史』第03巻の月報に書いたことなのですが、半跏思惟像の弥勒菩薩は、右手を頬に当てて左足は伸ばし、右足を曲げて組む姿しか、日本や朝鮮半島に伝わらず、また如意輪観音の中に取り入れられています。二〇〇〇年秋に東京国立博物館で開かれた「中国国宝展」に展覧された二対の弥勒菩薩によって明らかなごとく、北斉から唐にかけての中国では、左右対称の一対の半跏思惟像が流行しましたのに、日本には変容をうけて片方しか伝えられなかったことも注目すべきでしょう。

もう時間がありませんが、パリのビブリオテーク・ナショナルやロンドンの大英図書館ではなく、日本の各地に所蔵されている敦煌写経について触れておきます。

昭和十年（一九三五年）、三井家什宝展覧が開かれ、敦煌出土と銘打った仏典八点が公開され、仏典の二番目が「華嚴經 卷第四十六 北魏延昌二年写」で、図版に巻末八行と奥書の写真が掲載されました。この写経が紹介されますと、北魏の古写経という点よりも、隋開皇三年五月の宋紹演の納経発願の中の「又願亡父母託生西方天寿国、常聞正法」とある文面により、学界の注目を浴びることになりました。願文の「託生西方天（无？）寿国」が、斑鳩の中宮寺伝来の天寿国繡帳にかかわる『上宮聖徳法王帝説』に「応生於天寿国之中」とある文言との類似に関心が寄せられたのです。さきほど話題にしましたテレビ番組《隠された聖徳太子の世界～復元・幻の「天寿国」》で、三井文庫蔵の華嚴經を取り上げ、天寿国は阿弥陀淨土である、という説が強調されましたが、この華嚴經は偽写経であって「西方天寿国」を証明する史料には使えないのです。二〇〇三年に三井文庫蔵

の華嚴經に関する研究史上、画期的な成果である赤尾栄慶編著『敦煌写本の書誌に関する調査研究—三井文庫所蔵本を中心として—』（京都国立博物館）が公表され、同書所収の石塚晴通「華嚴經卷第四十六の問題点」は、この写経を「手の込んだ近代の偽写本の一である」と断定しており、同じく赤尾栄慶「書誌学的観点から見た敦煌写本と偽写本をめぐる問題」（『佛教藝術』二七一号〈敦煌学の百年〉）には「西方天寿国」ではなく「西方无寿国」と筆跡鑑定する根拠が示されております。

なお近刊の拙稿「天寿国と重興仏法の菩薩天子と」（『大谷學報』第八十三卷第二号、二〇〇五年）に、今回の講演の論拠をやや詳しく述べています。

ご清聴ありがとうございました。

汉 唐 间 东 亚 世 界 的 中 日 关 系 及 其 变 迁

牟 发 松

1. 中日两国的交流，如果从西汉后期倭人遣使汉乐浪郡算起，至唐亡约一千年（公元前 1 世纪？-907）。在这一千年中，此前早已存在的文化交流，更加显著和密切起来，并因双方国家的介入不断加强，至隋唐时代，以遣隋、唐使为标志，日本全面引进中国文化，构成中日交流史上的第一次高潮。（另一次高潮出现在近代，即日本明治维新特别是中日甲午战争之后开始的中国全面学习日本的高潮，准确地说应该是中国通过日本中转，引进和效法西方的文化制度和科学技术，勉力走向现代化之路。当时日本以汉字成批量地译介近代西方的人文社会科学和自然科学技术术语，后来又被成批量地引入中国，正如汉唐间中国成批量地汉译西方佛典，后来这些汉译佛教词语又随着汉字被成批量地引进到日本一样）

2. 在这一千年中，中国方面，大一统的秦汉帝国从稳固走向衰落，中经魏晋南北朝数百年动荡分裂，最后又重归一统，形成强盛的隋唐统一帝国。日本列岛则从酋长林立，渐次走上统一之路，及至 7-9 世纪，以大化革新为契机，经奈良时代到平安时代前期，日本形成了强大的中央集权，自立于东亚列国之林。就这一千年的中日关系而言，虽然交流及其影响总是相互的、双向的，但由于当时中国文化略略领先，因此两国间的交流主要表现为日本对

中国文化的汲取和接受，中国文化对日本的影响远远超过中国所受日本文化的影响。甚至不妨说这一千年的日本历史，就是间接直接地、日益加速地吸取和模仿中国文化，并通过消化和改造“唐风文化”，开始创造独具日本民族特色的“国风文化”的历史。（在公元八世纪以前所谓“阙史时代”，有关日本历史的文字记载，主要见于中国的文献，日本最古的史书《古事记》、《日本书纪》，也是模仿中国史籍并主要以汉文撰成。）这一时期的日本历史，不仅是在中国文化的影响下被创造出来的，而且也是以中国文字被记录下来的。（正因为“阙史时代”有关日本历史的记录仅见于中国文献，既缺乏参照，又零散而无系统，所以这一段历史留下了许多千古不解之谜，对考古发掘资料的阐释也带来诸多困难，然而假若没有中国文献中的珍贵记载，这一段日本历史势必更加茫然，不可考稽。在这种意义上，如果说研究这一段日本历史，主要就是研究中日关系史，似不为过）。

3. 汉唐间的中日关系，与东亚地区的历史发展具有内在的密切关联，东亚诸国历史的相关性，中日学界的前辈学者，如陈寅恪、内藤湖南、前田直典诸氏，均有卓越研究。其中西岛定生氏认为，“东亚世界”的形成，即东亚政治、文化的一体化，肇端于两汉，形成于六朝，完成于隋唐。东亚世界形成之后，“朝鲜三国及倭国要各自孤立地展开其历史，已经不可能。他们相互间经常随着中国王朝的初向而推展其历史”汉唐间一千年的中日关系及其变迁，正是以“东亚世界”的形成为背景的。两国交流得以发生的动因，推动交流不断前进的动力，既来源于同时又牵动着东亚世界的全局，而不仅仅局限于中日双边之间。所谓“东亚世界”的地理范围，依西岛定生氏的设定，是指“以中国为中心，包括其周边的朝鲜、日本、越南以及蒙古高原与西藏高原中间的河西走廊地区东部诸地域”，但就本文所论，主要指中国和环日本海的朝鲜半岛（北及黑龙江以南、以东地区）、日本列岛地区。环日本海地区大抵相当于汉唐时期的“东夷”所在，不过直到隋朝建立（581），在中国统治者的视野里，倭人在东夷诸族中并不特别重要，甚至长期被忽略。《史记》中所见司马迁对秦汉周边蛮夷世界的了解，就东方而言便只知有朝鲜而不知有日本。《汉书》中关于日本的记述，不过是在论述朝鲜半岛汉乐浪郡风俗时附带说了 19 个字而已。事实上在相当长的历史时期内，日本都是假手朝鲜半岛接收中国文化。隋唐以前日本列岛上的政权主动向大陆政权遣使朝贡，很大程度上也是出于调整日本列岛和朝鲜半岛间政治关系的需要。隋唐两朝中日之间的交流日趋密切，亦与东亚国际关系特别是与朝鲜半岛的形势不无关联。（中国固是东亚的中心，朝鲜半岛则是东亚的枢纽，值得注意的是，历史上中日之间所爆发的几次大规模战事，至少一半与朝鲜半岛有关。厕身于西边大陆、东边日本以及北亚游牧地区的多种势力之间的朝鲜半岛，只有对于大陆政权，深谙“以小事大之礼”，在各种势力间善于“折冲尊俎”，才能在矛盾的漩涡中求得生存，

维持平衡，而这也是东亚世界存立的基础。)

4. 就汉唐周边四夷而言，唯东夷被认为“天性柔顺，异于三方之外”(《汉书地理志》)，不像戎、蛮、狄，尤其是北狄，动辄“作梗”犯边。《说文解字》羊部“羴”字条，称羴“从人，从羊”，蛮“从虫”，狄“从犬”，“唯东夷从大，大，人也。夷俗仁。”史载东夷多为定居之农业民族，“率皆土著”，“力佃作”，“宜五谷”；诸国“或冠弁衣锦，器用俎豆”，其中尤以“朝鲜为大，得箕子之化，其器物犹有礼乐”，隋时号称“冠带之境”，“好尚经术，爱乐文史，游学于京都者，往来继路”。正是由于长期熏陶中国文化，加之地缘优势，故朝鲜半岛在东夷地区内被率先纳入以隋朝为中心的东亚政治、文化圈。同属东夷的倭国，情况则有不同。《三国志倭人传》所描绘的“鲸面文身”、缺乏礼仪、制度设施简陋、社会发展原始的倭国形象，历两晋南朝，诸史所载无多改变，只是增加了倭国遣使来朝的内容而已。但《隋书倭国传》所载，却显示出重大的变化。其一，日本作为东夷地区内的大国地位得以确立：“新罗、百济皆以倭为大国，多珍物，并敬仰之，恒通使往来。”其二，倭国的文化面貌和制度建设进步显著：“敬佛法，于百济求得佛经，始有文字”，年节风俗“略与华同”；“其王始制冠”；建立了相当于隋朝中央内官和地方牧宰、里正的职官体系。其三，派出多次遣隋使。关于遣隋使，特别是围绕着国书问题，留下了诸多疑点，学界迄今未取得一致意见，但遣隋使反映了倭国如下新动向，似应无异议：(1) 当时正处于大化革新以及藉以确立古代天皇制国家的前夕，倭国“冀闻大国惟新之化”，对引进中国文物制度以及佛法，有着如饥似渴的迫切；(2) 此前倭国虽长期通使中国，但对中国制度文物的引进，主要通过朝鲜半岛中转，遣隋使的派出表明日本直接从源头上输入中国文化；(3) 遣隋使负有引进中国文化的使命，实际上也负有在外交战线上参与朝鲜半岛角逐、提升本国地位的使命；(4) 崛起中的倭国充满着自信，它并不满意作为东夷地区大国的地位，而试图冲出环日本海地区，与东亚宗主国的隋朝分庭抗礼；(5) 正是从遣隋使开始，拉开了日本引进中国文化的崭新篇章，也正是遣隋使播下的种子，在以后的大化革新中开花结果。所有这一切，都标志着中日关系的新时代已经来临。

5. 汉唐间东亚世界形成过程中来自中国文化的强烈吸引力和巨大辐射力，在周边蛮夷民族中产生了对中央王朝的强大向心力，正是这种向心力，构成汉唐间中日关系不断向前推进的内在动力。在上述几种力量的交相作用下，7-9 世纪日本在政治体制和文化面貌方面发生了巨大的变化，国号变了(详下)，在东亚世界中的国际地位变了，在中原王朝心目中的形象也得到根本改观。值得注意的是对日本的评价的变化。开元十九年(731)唐玄宗致新罗圣德王敕书，称“三韩善邻，时称仁义之乡……文章礼乐，闻君子之风”

：开元二十五年唐玄宗又称“新罗号为君子之国，颇知书记，有类中华”。朝鲜的文化在东夷诸族中素称发达，这样的褒扬并不足怪。《续日本纪》卷3所载大宝元年（701）遣唐使归国后的报告有云：“唐人谓我使曰：亟闻海东有大倭国，谓之君子国，人民丰乐，礼义敦行。今看使人，仪容大净，岂不信乎。”又《东大寺要录》卷1引《延历僧录》，载唐玄宗“加号日本为有义礼仪君子之国，复元日拜朝贺正，敕命日本使可于新罗使之上。”《文苑英华》卷471载张九龄撰《（唐玄宗）敕日本国王（圣武天皇）书》，开首即有“敕日本国王主明乐美御德，彼礼仪之国”云云。又王维《送晁监还日本国序》：“海东诸国，日本为大。服圣人之训，有君子之风，正朔本乎夏时，衣裳同于汉制。”上引四条，中日史籍各有二条，其中唐玄宗以日本为礼仪之国，两国记载可相印证，应属可靠。如果说唐玄宗的意见代表着唐廷官方的日本观，那位称扬日本为君子国的唐人，以及朝衡的诗友王维，则代表了民间人士的日本观。那位唐人自称在见到遣唐使之前，已多次听说日本为君子国，可见这是当时唐人的一般看法。（两唐书日本国传，不曾记述其文身之俗，也不像前史一味载录许多有异于中国的夷貊之风，转而对遣唐使臣之“好读经史，解属文，容止温雅”、“善书（法）”，留学生之“慕中国之风”，勉力求学，“好书籍”，“所得锡赉尽市文籍泛海而还”，多有载述。）上述表明，至迟在唐玄宗时代，日本后起直追，已与新罗同被视为礼仪君子之国，被唐朝为中心的东亚文化圈所接纳。这是汉唐间中日关系及其发展的一个重要成果，同时也标志着东亚世界的最后形成。

6. 众所周知，朝鲜半岛和日本列岛虽然同属隋唐东亚世界，但二者的政治身份是不同的。朝鲜诸国，包括统一了半岛的新罗，一直是唐朝的朝贡国，日本却一反隋以前主动要求大陆政权册封的传统，始终独立于隋唐的册封、羁縻体制之外。尽管朝鲜的蕃属和日本的独立，有时不过徒存名义，但这样一种名义仍能大体反映出两国与隋唐帝国的实际关系及其差别。众所周知，在天宝十二载（753）长安大明宫含元殿的朝贺大典现场，日本遣唐使曾与新罗使节争席次，并以日本使节的胜利告终。由于此事仅见于日本史籍，中国方面全无记载，因而其真实性受到了质疑。此事的细节也许不尽真实，但它既见于日本使节回国后的报告，又被郑重载入日本国史，至少真实地反映出日本对自己在东亚国际秩序中的位置和名义，是何等的关注与重视。据《日本书纪》卷26齐明天皇五年（659）七月戊寅条引《伊吉连博德书》，载当年闰十月二十九日，遣唐使“驰到东京，天子在东京。三十日，天子相见问讯之。……十一月一日本，朝有冬至会，会日亦觐，所朝诸蕃之中，倭客最胜。”所载遣唐使在洛阳

的活动，就时间、场景而言，可得到中国文献的印证，而且还可以证之以空海《性灵集·为大使与福州观察使书》。又《旧唐书·礼仪志三》，开元十三年（725）十一月，唐玄宗封禅于泰山，事毕后在御帐殿受朝觐，“戎狄蛮夷羌胡朝献之国”的使节“咸在位”，有关的席次安排如下：“突厥颉利发，契丹、奚等王，大食……日本、新罗、靺鞨之侍子及使，内臣之番，高丽朝鲜王，百济带方王……。”在这样一个庄严的礼典上，使者们的席次安排显然是经过慎重考虑的。日本排在新罗之上，第一个理由应该是三十年后日罗使节争长时日使所提出的理由：“自古及今，新罗之朝贡日本国久矣。”其次则应是日本与唐并无朝贡关系，为绝域之敌国。至于亡国已久的“高丽朝鲜王”、“百济带方王”，虽有王名而无国土，寄人篱下，已属“内臣之番”，故列在日本、新罗之后。又据《续高僧传·释慈藏传》，唐太宗、高宗时代，新罗国“每年朝集位在上蕃，任官游践并同华夏”。当时唐、罗双方为对抗高丽，关系极为友好，新罗甚至改从唐朝正朔和衣冠制度，它在朝集时位居第一，应属事实。朝集使的位次，与唐朝和各国间的关系以及特定的国际形势，都有关联，《续日本纪》所载唐罗使节争长事件，虽因史料有阙难以定论，但不宜简单地视作空穴来风。（《入唐求法巡礼行记》卷1开成四年（839）二月廿七日条，记录了圆澄所述当年正月唐廷“会集诸蕃”的情况：“总五国，南照（诏）国第一立，日本国第二。自余皆王子，不着冠，其形体屈丑，着皮毡等。”当时唐朝为了牵制吐蕃，极力怀柔南诏，关系友好，开成年间南诏曾连续朝贡，故列南诏第一。看来这次日本使者没有就席次提出抗议，但从圆澄的转述和圆仁的记载，仍可见其忿懣之情。）

7. 争长事件明确地反映出日本力图与中国保持对等外交。两唐书《日本传》称日本使者“多自矜大”，以及众所周知的中日国书事件，都具有相同的背景。实际上日本改国号问题，亦与之有关。倭国何时何原因改国号为日本，史无定说。（关于改国号原因，《旧唐书·日本传》凡三说：（1）“日本国者，倭国之别种也。以其国在日边，故以日本为名。”又列二种别说：（2）“自恶其名不雅”而改。（3）原名日本的小国吞并了倭国之地，仍沿用其旧号日本。细绎其文，旧书的第三说和第一说应合而为一。《新唐书·日本传》提出两说：（1）“后稍习夏音，恶倭名（不雅）”，又以“国近日所出”（引日本“使者自言”），遂改国号“倭”为“日本”。（2）倭国兼并了原名日本的小国，遂“冒其号”称日本。新书第二说与旧书第三说正好相反。）两唐书关于日本改国号原因，实列三说：（1）列岛上小国日本（以其国在日边故名）吞并倭国后沿承旧号；（2）倭国自恶其名不雅而改号日本（以国近日所出故名）；（3）倭国兼并小国日

本后冒称其号。关于何时改国号，中日史籍亦无确载，只有朝鲜的《三国史记》将日本改国号明确系于新罗文武大王十年即公元 670 年。但该书成书甚晚，此条记载又得不到中、日文献的印证。

日本最古的两部史书《古事记》和《日本书纪》，前者公元 712 年成书，但书中“皆用倭字，绝无日本字”（《大日本史》“修大日本史例”），后者 720 年成书，遂以“日本”名书。论者据以推断，改日本国号的时间，应在公元 712 年至 720 年之间。这样的推断是有一定根据的。

《旧唐书》并列倭、日本二传，前者记事终于贞观二十三年（649），后者始于武周长安三年（703），论者据以推论改日本国号的时间，应在公元 649-703 年之间，亦即高宗、武后统治时代。但还有一条资料值得注意。《史记·五帝本纪·虞舜纪》“东长、鸟夷”句，张守节《正义》云：“《括地志》云：‘……又倭国西南大海中岛居凡百余小国，在京南万三千五百里。’案：武后改倭国为日本国。”同书《夏本纪》“岛夷卉服”句《正义》又云：“又倭国，武皇后改曰日本国。”张守节为唐人，所著《史记正义》成书于开元二十四年（736），离武后时代不远，加之当时中日交流频繁，因此他在《正义》中两次指出武后改倭国为日本国，不应无据。虽然《正义》此条也不见于其他记载，但它对于上述日本改国号的时间应在高宗武后时期的推断，是有力的佐证。

又陕西历史博物馆10月10日，宣布首次发现日本留学生墓志，凡12行171字，志首称“公姓井，字真成，国号日本，才称天纵”云云（孙东民《遣唐使墓志轰动日本》，《人民日报》2004年10月13日第三版）这是迄今为止世界上发现的最早出现“日本”国名的实物资料。井真成卒于唐玄宗开元二十二年（734），据考，他是开元五年（717）随第八次遣唐使团抵达中国的，与阿倍仲麻吕和志备真备年龄相仿并一道来华。这方墓志，对于上述日本改国号应在712-720年之间的推测，是更有力的实证。

根据上述，笔者对于日本改国号的问题，有如下臆测：倭国正式定号日本，似应在公元 712-720 年间。但“日本”国号的出现和行用，可能更早，至迟应当始于小国日本兼并倭国或者被倭国兼并之时。遣隋使所带日本国书，国王自称“日出处天子”或“东天皇”，就有故意避开倭国国号的嫌疑。《日本书纪》大化元年（645）七月丙子条所载日本国王给高丽、百济的诏书，书作“明神御宇日本天皇诏旨”，虽有可能是《书纪》作者追改，但也不能排除当时日本的外交文件对本国国号的称呼别有体例。高宗武后时期至玄宗开元四年（716），日本派出多批遣唐使，双方交流频繁，可能最初是使臣们“自恶倭名不雅”，因而改称当时已经出现的“日本”国号，所以也有可能是武则天接见遣唐使时提议修改（她曾亲自宴请大宝元年遣唐使臣朝臣真人）。据以提议改号日本国。后来倭国正式定号日本张宇节遂以为是根据武后提议

所改。据《唐令拾遗补》，《大宝令》“诏书式”有“(明神)御宇日本天皇诏旨”条，《令集解·公式令》引《古记》释云：“御宇日本天皇诏旨，对邻国及蕃国而诏之辞。……”据上引《日本书纪》大化之年七月丙子条所载条日本国王给高丽，百济诏书，可知当时日本对外国书中，国号已作日本。公元701年制定的大宝律令规定“日本”为对外的国号，大概此后不久，日本作为国号被正式确定下来，并反映在《日本书纪》的编撰中。日本何时改国号，虽因史载阙略，难以定讞，但可以肯定的是，它同样体现了日本竭力维护本国外交地位的用心，这也是长期以来中日交流过程中深受华夷意识影响所致。

8. 汉唐间中日两国长期保持通使往来，双方都有着明确的政治目的，如日本方面，需要从大陆政权的册封中，获取统治日本列岛以及争夺朝鲜半岛的合法性资源，中国方面，需要营造万方来朝的太平盛世形象，提高王朝的正统地位。隋唐时期，中日之间的频繁交往乃至兵戎相见，无不与双方的国家利益和东亚国际形势攸关。虽然双方起初交往的目的不在于文化交流，甚至文化的引进和交流都是服务于特定的政治目标，但这一千年的交往史留给后人的，最珍贵的还是文化遗产。对于中日交流史，笔者是门外汉，之所以撰此短文，就教于各位，还在于汉唐间一千年之久的两国交流，在两个民族的思想感情深处，留下了许多美好温馨的记忆，也沉淀着许多意味深长的往事，值得我们回味和记取。另一方面，如上所述，汉唐间的中日关系及其发展，是以东亚世界的形成为背景的，因此双方交流的过程、内容及其发展，以及发展演变过程中的经验与挫折，不仅属于中日两国的历史，而且也是属于整个东亚世界的历史，后人有责任认真清理和反思。

魏 晋 南 北 朝 時 代 に お け る 世 界 秩 序 の 変 動 と 古 代 日 本

川 本 芳 昭

倭国女王卑弥呼による二三九年における中国の魏への遣使は、諸葛孔明と司馬仲達との間で行われた五丈原の戦いののち勢力を強めた魏が、遼東に拠る公孫淵を討ったことと密接に関係している。倭国はその後、魏を継いだ西晋にも遣使するが、その西晋が八王の乱や五胡の侵入によって崩壊

すると中国への遣使を取りやめる。そして南北朝時代が開始される直前の四一三年、倭国は西晋への遣使以来、実に一四七年ぶりの沈黙を破って中国への遣使を再開する。こののち南朝の宋との間に密接な交渉が展開されるが、その宋が北魏の攻勢を受け弱体化すると、再び中国と倭国とは百年以上に及ぶ長い外交関係途絶の時代へと突入してゆく。そして途絶が再び解消されるには、南北朝時代を終息させて中国を再統一した隋の勢威が朝鮮半島に及ぶ、七世紀冒頭をまたねばならなかった。

かように古代日本は大陸の政治情勢に敏感に反応し、大陸にある国家と交渉、断絶を繰り返した。その反応がいかに微妙な点にまで及んでいたのかは、例えば遣隋使の際、日本が中国に譲歩する形で天子と名乗り、さらにそのことをも咎められて天皇号の採用に至っている点などに如実に表れているといえる（この点については昨年度のCOE報告会において報告、その後『史淵』一四一輯に「隋書倭国伝と日本書紀推古紀の記述をめぐって」として発表）。

所謂魏晋南北朝時代にあつては中国との間で冊封関係（朝貢関係）を結んだ周辺諸国のリーダー（こうした存在を外臣という）が、中国王朝の爵位のみならず官職をも受けて中国王朝の臣下（こうした存在を内臣という）となるという現象が見られた。倭国王が王号のみならず將軍号や都督号を与えられていることなどにもそうした現象が端的に示されているが、それはこの時代における中国の王朝権力の弱体化と、中国王朝がそうした状況を踏まえつつ周辺諸国をその体制へと取り込もうとした意図の存在とによって促進されたものである。

しかし、一方でこれを胡族をはじめとした諸民族の側から見たとき、それは諸民族の自立への動きと併行するものでもあったのである。

五胡の侵入はすでに述べたように、その後、北魏の拡大へと展開し、北魏の拡大を懼れた宋は北魏を封じ込めるための国際的包囲網の形成を企図する。四五〇年、北魏の世祖太武帝は五十万の大軍を發して江南に抛る宋を攻め、長江の北岸にまで達した。そのとき、太武帝が宋の太祖に親書を送り、その中で、「この頃、関中で蓋吳という人物が反逆し、隴右の地の氐や羌を扇動しているが、それはお前が使いを遣わして誘っていることである。……またお前は以前には北方の芮芮（モンゴル高原にあった柔然のこと）と通じ、西は赫連（一六国の一・夏国を建国した匈奴赫連氏）、蒙遜（河西地帯にあった匈奴・沮渠蒙遜のこと）、吐谷渾（中国の西部・青海省の地にあった鮮卑）と結び、東は馮弘（十六国の一・北燕の主）、高麗（高句麗）と連なった。凡そ此の数国は、我みなこれを滅したり。（『宋書』索虜伝）」と述べているのは、南朝の宋の時代におけるそうした動き

の一端を示している。

しかし、こうした包圍網は時代を下るに従って徐々に突き崩されてゆくのである。上で見た四五〇年における北魏の南侵は、そうした状況を決定づける上で大きな役割を演じるようになったといえる。

この南朝を中心とした政治体制の衰退は、山東半島の喪失という面にも端的にあらわれている。いわゆる倭の五王の時代の山東半島は、倭国をはじめとした東夷諸国の南朝への使節派遣において、その中継地点として極めて大きな役割を果たしていた。そして、四一三年から倭国の南朝への使節の派遣が始まるのも、東晋の將軍であつた劉裕がその地にあつて鮮卑慕容部が建国していた南燕を滅ぼし、山東の地を領有したことに関連する。ところがその山東半島の地は、四六九年正月以降、今度は北魏の領有するところとなるのである。

それまで南朝領であつた山東半島を手中にした北魏は、早速その経営に乗り出す。すなわち、その翌年（北魏皇興四年）には山東に新たに光州という州を設置し、その五年後の延興五年（四七五）には軍鎮を置き、その支配を一段と強化しているのである。以後北魏はここを基地として南朝へ朝貢する東夷の船舶を厳しく監視するようになる。

そのため、東夷の諸国から南朝へ送られた使節や南朝からの答礼使が、山東の沿岸で遊弋する北魏の船舶によって拿捕されるという事態まで生じるようになっていく。また皇興三年（四六九）二月には、柔然、高句麗、庫莫奚、契丹等の北アジア、東北アジアの諸国が相継いで北魏に朝貢するが、これら遣使は北東アジア地域の諸国が南朝に朝貢する際のセンターとしての役割を果たしていた山東の地がその前月に陥落したことに触発されたものである。これは逆に見れば、山東半島が魏領となることが東夷諸国にとってどれほど重大な意味をもつものであつたかを示している。

つまり、この五世紀の後半の時点で、南朝が目指した国際連携のもとでの北朝の封じ込めという施策は、その東部戦線においてはその連環が断ち切られたことがわかるのである。

また、当時、西部の吐谷渾や河西回廊の勢力、さらには北方の柔然の勢力などとの連絡に大きな役割を果たしていたのは長江上流の四川の地であつたが、この地も長い南北抗争の末、南北朝の後半には北朝の勢力の傘下に組み込まれることになる。それは西魏廢帝二年（五五三）のことであつたが、このとき江南は侯景の乱によって生じた混乱の中にあつた。当時、征西大將軍として四川の地にあつた梁の武帝の八男である武陵王紀は五五二年八月、軍を率いて東下し、湖南の地を図ろうとした。また当時、湖南の地には武帝の七男である湘東王繹（後の元帝）がいたが、彼は憂慮して

救いを北方の西魏に求め、四川の地を背後から撃つことを求めた。これに対し西魏では將軍尉遲迥を派して四川を討つ計を定め、翌年三月、軍を起こす。武陵王は防戦に努めたが、結局八月成都是陥落し、四川は西魏の領有に帰し、南朝は対北朝の国際戦略上の重要拠点である四川の地をこうして喪失したのである。

このような流れを受けて、南北朝時代は最終的に北朝最後の王朝である隋による中国再統一へと帰結してゆく。このことを南朝の側から見ると、それは南朝を中心とした世界システムの崩壊を意味していたといえるであろう。

北朝の拡大、隋唐帝国の出現は、南朝のみに影響を及ぼしたのではない。先に取り上げた北魏太武帝が宋の太祖に送った手紙にも見えるように、それまで南朝と連動、あるいはその傘下にあった柔然、吐谷渾、雲南爨蛮（雲南にあった南蛮勢力）、高句麗、百済などの諸勢力は、唐代にかけて相継いで滅亡する。一方で、それら諸勢力の背後にあって勢力を蓄積してきていた突厥、吐蕃（チベットで興起）、南詔（雲南で興起）、渤海、新羅、日本などが興隆してくるのである。

こうした動きを大局的に見たとき、魏晉南北朝時代は、漢から魏晉南朝へと受け継がれた世界秩序と、それまでの華夷関係の変質の中から出現した五胡十六国、北朝、隋唐によってになわれた世界秩序が、相克し、最終的には前者から後者への転換が生じた時代であったということが出来る。そしてそうしたなかにおいて東夷の小国としての倭国は、魏晉南朝によって担われた冊封体制から自立し、自らを中華とする秩序を形成するようになってゆく。一方、同じく夷狄とみなされていた五胡も自己を中華とみなすようになり、胡漢の融合を経て最終的には隋唐帝国による世界秩序をうち立てることとなるのである。この点は一方が中国内部において、一方が中国外の日本において生じた現象であるという点では相違するが、いずれも漢魏晉的秩序の中において夷、胡として位置づけられた勢力が、そうした体制を突き崩し、中華を標榜するようになるという点で歴史的軌跡を同じくする現象であるということが出来るのである。

こうした同軌現象は、倭国が大陸の政治状況に敏感に反応していたという点以外にも表れており、倭国や朝鮮の国制のレベルにまで及ぶものであった。

倭国は当初、南朝宋の皇帝から安東將軍、安東大將軍に任ぜられ、安東大將軍府を開いて中国を中心とした華夷秩序に参入しつつ古代国家を建設してゆく。そしてそうした展開の中から形成されてくる天皇を中心とした華夷秩序は、そののちの日本人の世界観を大きく規定するものとなるので

ある。

その事例を、我々は蝦夷を東方に住む夷狄（東夷）とし、それを鎮圧するために日本版の皇帝である天皇に任命された征夷大將軍が將軍府を開くという政治構造、京都を洛陽と呼称する構造、安土桃山時代に日本に來航するスペイン人などを南蛮と呼称する世界観、幕末、東方からやってきた夷狄であるペリーを尊皇攘夷の名の下に追い払おうとした思潮の沸騰などにみることができるのである。

日本白村江之战 — 政治决策与军事行动 —

韓 昇

1. 先行研究的再探讨

白村江之战是东亚世界形成史上的一次重大事件。日本为什么要出兵百济，其立场和利益何在？

关于白江之战的研究，日本学者起步甚早，最重要的研究是池内宏发表于1932年的长篇论文《百濟滅亡後の動亂及び唐・羅・日三國の關係》，后来日本学者发表了不少研究白江之战的论文，但基本上没有超出池内宏讨论的范围。1945年以后，日本史学界对军国主义时期的史学进行深刻的反思和批判，石母田正《论古代的帝国主义》呼吁学者从东亚世界的角度重新认识白江之战的历史意义，得到积极的响应。就白江之战本身的研究而言，最重要的成果有八木充《百濟の役と民衆》，指出参战的日军为地方豪族各自统帅的武装，拼凑而成，没有垂直的指挥系统，所以，失败是难免的。此论一出，反响甚大，几乎成为定论。鬼头清明《白村江の戦いと律令制の形成》和《白村江》，肯定了八木充的观点，但也提出修正，认为日军编制应是按照出兵时间区分的。笠井倭人《白村江の戦いと水軍の編成》，则分析日本水军的组成情况。然而，从八木充以来关于日军编制导致战败的见解，我以为是大有疑问的，故于此提出新的分析论证。

2. 日本与新罗、唐朝关系的转变

日本是岛国，其发展端赖于同大陆的联系，获得大陆的资源、人才，吸收文化制度。其与大陆交往的主要通道，就是朝鲜半岛。甚至可以说，朝鲜半岛是日本的生命线。

自古以来，日本就不断侵袭朝鲜南部，谋求获得一个稳固的立足点，成为通向大陆的桥头堡。日本对南朝的外交，就是围绕争夺对朝鲜半岛南部国家的控制权而展开的，由于未能达到目的，故日本中止了同南朝的国交。隋朝建立之后，日本主动派遣使者到隋朝，甚至向隋朝学习政治制度，在国内推动改革。此友好关系延续到初唐。日本同隋唐的交往与前期相比，发生了如下变化：亦即一方面同隋唐友好。另一方面，不希望隋唐介入其与朝鲜的关系。

唐太宗晚期到高宗时期，当新罗完全倒向唐朝之后，朝鲜南部国家间的动态平衡格局就要发生重大变化，日本对此保持高度警惕和防备。651年，新罗国内实行唐化改革后，其使者前往日本，却遭驱逐，导致两国关系大大恶化。日本违反国交礼仪，粗暴对待新罗使者，不惜恶化两国关系，并不是反对隋唐制度文化，而是反对新罗将唐朝引入朝鲜半岛南部。唐朝与新罗的联盟，必将大大限制日本在朝鲜南部的活动空间，加速日本被动地纳入唐朝的国际关系体制当中。至此，日本与百济、高句丽在抗衡唐朝势力进入朝鲜半岛上，多了一层共同利益。由此可知，后来日本出兵百济而与唐朝正面交战，是一个合理的演变结果，完全是基于日本自身的利益，而不是因为百济同日本的友好关系。

3. 日本参战前的准备

在这种形势下，唐朝灭百济，自然引起日本的高度紧张。660年9月，百济达率沙弥觉到日本，报告百济灭亡，鬼室福信率残部抵抗的消息。10月，鬼室福信派人将一百多名唐朝俘虏送到日本，请求日本出兵增援，并请送还在日本的百济王子扶余丰璋，立为新君。日本齐明天皇同意百济所请，开始整军备战，建造船只，拟攻击新罗。齐明天皇移居难波宫（今大阪市），坐镇海港。翌年正月，齐明天皇亲自出动，自海路经吉备大伯海（今冈山县邑久郡），伊豫熟田津（今爱媛县松山市），三月抵达北九州那大津（今福冈县福岡市博多），建立磐瀨行宫。五月，迁居博多海边的朝仓橘广庭宫，摆出一付决战的架势。就在这个时刻，发生了一件常被忽视的事情，那就是唐朝释放了扣押在长安的日本使者，自越州送回日本。迅速释放，是为了能赶上四月的季风。因此，放回日本使者，是唐朝他们传递信息。其具体内容，史无传文，不得其详。从后来局势发展推测，应该是传达唐朝无意进攻日本，甚至可能是争取日本。

齐明天皇移驻博多后，并未立即采取军事行动，七月，死于朝仓宫。天智天皇即位，十月回到难波。从天智天皇即位到 663 年与唐朝战于白江，《日本书纪》的记载多有混乱与可疑之处，这里根据现存唐朝、朝鲜和日本三方的记载，将日本在此期间的行动作一整理。

天智天皇继位后，暂时停止了出兵计划。前面考证的唐朝送回日本使者伊吉博德带回唐朝的信息，对于日本最高决策，应该起了重要作用。这期间，日本主要进行两方面的工作：

第一，是在军事物资上支援高句丽和百济反抗势力。通过支援百济反抗势力，使唐朝和新罗难以迅速平定百济，以争取时间，观察形势，留下决策的进退空间和介入的桥头堡。

第二，积极整军备战。

(1) 日本参战的将领主要为京畿地区出身且出仕于朝廷的豪族，且多与水军深有关系。但是，他们统率的士兵来自全国各地，可知征兵在全国范围内实行。值得注意的是上述京畿豪族以外，并未见到地方豪族的高级将领。这说明来自地方的兵士应编入日本远征军中，而不是作为独立的地方武装参战。因此，前述八木充、鬼头清明以来所谓日军由地方武装互不统属地投入战场，各自为战的观点，难以成立。

(2) 建造大批战船和铸造兵器，储备军粮。

从 660 年唐朝灭百济到 663 年，近三年的时间里，日本最高当局一直在盘算是否出兵以及为什么出兵的问题。故其出兵是雷声大雨点小，采取拖延战术，让百济反抗势力、高句丽同唐朝、新罗双方去拼个你死我活。

站在日本的立场，有两个至关重要的问题不能不考虑，首先，唐军出现在百济，与对日本抱有敌意的新罗联盟，将使日本失去在朝鲜南部的利益，故日本要争。其次，朝鲜战火将来会不会进一步烧到日本，也是无从预料的。从这两个方面来看，天智天皇虽然改变齐明天皇的激进政策，但肯定始终在观望形势，从未打消军事介入的方案。在军事介入的考虑上，战场的形势对于日本的决断十分重要。如果唐朝迅速取胜，日本也就难以插足，问题是唐朝在南北两线，均未能取得决定性的胜利，便使得日本跃跃欲试。

在这个时候，情报是非常重要的。但是，从《日本书纪》记载分析，日本朝廷获得的情报相当混乱，军队谎报军情，恐怕是存在的。例如前述 662 年日军坚守硫留城，分割唐军与新罗联络之类，是个例证。另一方面，百济和高句丽也用各种方法做日本的工作。百济不断将唐军战俘送到日本来，无非是报功和坚定日本出兵信心。高句丽也在动员日本，661 年 12 月，向日本谎报战绩，鼓励日本尽早出兵。在不实情报影响下，日本低估了唐朝的军事能力，认为有机可乘，这无疑是促使其作出参战决断的重要因素。

4. 参战的政治决策军事行动

日本出兵要达到什么目的呢？分析《日本书纪》含混而矛盾的记载，可以看出，日本朝廷对此问题颇有分歧，主要有两种，第一个方案是乘机攻略新罗。这是日本朝廷一派长期的夙愿。因此，唐朝灭百济的消息传来，日本朝廷首先想到的就是攻掠新罗。此后，进攻新罗成为出兵的方案之一。

663年3月，日本大规模出兵朝鲜，然而，其军队是从新罗登陆的，而不是从百济反抗势力控制的地带登陆。从三月登陆到八月决战于白江，宝贵的五个月时间，日本都在攻略新罗，让唐朝和新罗军队得以集中，唐朝援军孙仁师部得以赶到，以逸待劳，大破一路转战而来的日本、百济联军。

日本学术界对于日军在白江战败的原因，一般归结为日本军队的组成，亦即日军由各地豪族武装临时组合而成，没有统一的上级指挥机构，遭遇组织严密的唐军，当然失败。这几乎成为定论。如前所述，日军确实是从各地征召而来，将领之间的协调，会有些问题。但是，从《日本书纪》记载可以看出，首先，日军部队分为前、中、后军三个战斗序列，各有正副将军二名，总兵力二万七千人，若平均分为三部，则每部九千人，还是合理的，也有上下指挥系统存在，故不能说成是缺乏组织的乌合之众。其次，近三万人的部队，在一个方面发动突袭，是强大而有力量，大有成功把握。日军越海而来，战役发起的时间、地点都难以预料，防不胜防。因此，战役的主动权实际上掌握在日军手里。再次，唐朝在朝鲜南部的兵力不大，才会被百济反抗势力长期围攻，艰难据守。也就是说，唐军不具有兵力优势。因此，日军失败的关键在于战略指挥错误。如果日军从日本直接在白江一带登陆突袭，与据守周留的百济主力会合，则形势殊难预料。

然而，日本出于对朝鲜南部利益的执著，短视地将应为突袭性的攻击，变成从次要战场发起的推进式进攻，一路攻城掠地，完全丧失战役突袭性优势。唐军得以掌握日军动态，不与这股日军作战，主力集中于周留城，全力包围这里的百济反抗武装，围而不攻，分断敌军，集中兵力，围城打援。显然，刘仁轨已经料定日军必来，早已严阵以待。可见日军自弃优势，战略失误何其严重。此时，日军已无胜算。

日本出兵的第二个方案，是出兵百济，扶植听从于日本的政权。日本手上握有百济王子扶余丰璋，当然是一张王牌。百济君臣王室被唐军虏往唐朝后，扶余丰璋就成为反抗势力号召民众的象征，故鬼室福信在660年10月领导百济残部反抗时，立即向日本要求迎回扶余丰璋，以立为新君。然而，日本并没有响应鬼室福信的请求，而是关心自己在百济的利益，忙着给丰璋

授以冠位，妻以日妇，为的是战后如何建立和控制百济亲日政权。一直等到662年，才护送丰璋回国。

丰璋回到百济之后，其身边的日本军将就想夺取福信的领导权。所以，丰璋与福信的矛盾，实际上是日本要夺取百济反抗势力领导权的斗争，丰璋只不过是傀儡。日本派遣军借丰璋杀死福信，夺得了领导权。但是，大敌当前却挑起内讧，不能不使得百济抵抗将士士气沮丧，人心涣散。

军事战略失误，和政治上的内讧，才是决定日本惨败于白村将的决定性因素。

東 ア ジ ア に お け る 律 令 施 行 域 と 冊 封 関 係 — 亀趺碑策などを題材として —

平 勢 隆 郎

東アジア冊封体制は西嶋定生が言い始めた。以来、多くの論者がこれに関して検討を進めてきている。

ところが、冊封関係に重きをおきすぎて、西嶋が重視した儒教理念の問題をおろそかにしたり、また、儒教理念のいかなる点に関わるかについての誤解が絡んだりしているようだ。さらに言えば、西嶋は、中国皇帝の統治域の周囲に、同じく律令が根付いた後の体制に関する言及もある。しかし、これについては、さほど議論されずにきている。

中国で律令（漢代と同じ法体系だと言っているのではないが）が根付いたのは、戦国時代のことである。天下の中に複数あった国家それぞれが法整備を進めた。それぞれの国家には、天下の中で領有を主張する特別領域があり、その特別領域は重なり合う形で存在しつつも、いずれの特別領域も天下のごく一部を問題にしていた。それぞれの国家領域はその特別領域の一部であり、いわば畿内の位置づけがなされていたようだ。

このそれぞれが述べる特別領域とその外との関係は、現実には国家と国家の外交関係になっている。まだ国書のようなものは存在しなかったようだが、それぞれの君主を一尊とする論理と、国家連合を組む際のやりとり（縦横家が担う）など現実に即した関係を構築する上での相手への配慮が併存する。この関係は、中国の周辺国において律令が根付いた後の中国皇帝と周辺国の君主との関係を考える上でも無視することができない。

この戦国時代の国家関係は、後の東アジア冊封体制を語る上で、先駆的に位置づけるべきなのだが、従来、この点は、内臣・外臣の問題を除いてなおざりにされてきている。

問題の鍵は、自前の律令にある。本発表が律令施行域に注意を喚起するのは、そのためである。

本発表では、以上の点を念頭におきつつ、東アジア冊封体制の成立とその後の変容を簡単に述べ、その中に身分制の強い碑石である亀趺碑を位置づけてみることにしよう。

中国における文書行政の開始は、各国における変法運動に関わる。伝説によれば、魏の李悝が法経六編を作り、それが法典編纂の嚆矢とされている。前四世紀後半には、各国君主がつぎつぎに王を称する。そのころに急速に法令が整備されるのであろう。

ただし、無論のこと、法令が整備されてから文書行政が始まるというより、すでに開始されていた県の官僚統治において、文書のやりとりが頻繁になったことがきっかけにさまざまな問題が噴出し、それに対処するための法典編纂が進んだと見た方がよい。

戦国時代の法典編纂は、戦国時代各国で進んだ。しかし、官僚が法典の運用に絡んでおり、かつ、そうした官僚が身の安全を保つ必要から、各国をわたりあるくことが頻繁にあった。そのため、各国の法典の内容は、すみやかに他国に漏洩していたようだ。雲夢睡虎地11号秦墓出土の竹簡には、魏律が引用されている。

国家関係を知るための文書は、『戦国策』のような形態をとって提供されている。出土遺物である『戦国縦横家書』などから本来の文書の書式を推測してみると、諸国の意志を伝えた縦横家が、各国の王に意見書を提出するという形をとっていたようだ。縦横家は意見を提出した王を「大王」と呼び、他の国家君主を「楚王」「魏王」など国名と王を連ねて表現している。ある国家の中央にとびこめば、おそらく王は唯一の存在であり、他国の君主は諸侯としての位置づけがなされたはずである。

つまり、唯一の王を自任する国家君主が天下という漢字圏の中に複数存在したのである。

この天下を統一したのが秦の始皇帝である。

しかし、その後状況が若干変化した。始皇帝の軍隊は南に進軍し、広東の地を制圧したのである。この結果、天下は拡大されることになった。始皇帝の死後、広東の地には南越帝が、また福建の地には閩越王や越の東海王が並びたつた。閩越王や越の東海王の国家で、どこまで漢字が根付いていたかは不明だが、南越は漢族の国家であった。南越は帝の制度をもって

おり、おそらく律令を整備していたはずである。だから、ふたたび漢字圏の中に複数の律令国家が成立したのである。

閩越王や越の東海王の国家と漢との関係は、後の漢と周辺国との関係を語る上での先駆として位置づけられる。一方が文書行政を整えているのに、他方はそれが無いという状況がある。同じ状況は南越と閩越王や越の東海王の国家との関係についても言えそうである。

戦国時代の中華（中華という言葉はまだなく、華夏・中国などいくつかの言い方があった）は上記の特別地域であり、それは天下の一部にしかない。その時代の中華・夷狄観では、特別地域の中の民と特別地域の外とが、王の徳に化する、あるいはそこに王の徳がおよぶと考えている（徳化く『呂氏春秋』勿躬、『韓非子』難一>や徳沢く沢はめぐみ。『詩』小雅車牽序、『韓詩外伝』二、『春秋繁露』十指など>という言葉で表現されている）。

儒教經典（の祖形）など、戦国時代の書物に見える中華・夷狄観は、中華・夷狄いずれも天下の中を問題にする。ところが、始皇帝の統一により、天下はすべて皇帝が直接支配する領域となり、その外に夷狄を設定すると、それは天下の外を問題にすることになった。戦国時代に天下の中に特別地域を設定することでうまくいっていた説明は、うまくいかなかった。

この状況下、緯書の助けをかり、注釈を増補してあらたな中華・夷狄観をうちたて、儒教經典を利用しつつ対応できるようになったのが後漢のときである。その基礎は王莽のときにできあがった。

さて、亀趺碑は後漢のときに豪族の墓前碑として始まり、薄葬令で地上から姿を消した後、六朝時代に復活した。身分規定性が強い碑石となり、唐のときには五品以上という、いわば貴族身分の者に建碑が許された。かくして、亀趺碑は、本来天下の内の官僚のランクづけに関わっている。

ところが、東アジア冊封体制は、官僚統治域の外にまで、擬似的な政治関係を作り出す。しかも、その擬似的な政治関係を亀趺碑立碑の上で利用する場合もあった。あくまで利用だけで、実質は周辺国の国内の官僚序列を問題にしているのだが、「形」の上では、中国皇帝を巻き込むかのものになっている。

具体的に述べれば、中国明朝には、南京に都を置いた洪武帝時代、三品以上に亀趺碑をゆるすという規定と、五品以上に亀趺碑を許すという二つの規定の併存状況があった。しかし、洪武帝の一族を滅ぼして北京に都をおいた永楽帝以後、五品以上に亀趺碑を許す規定が継承されることになった。明朝時期の朝鮮王朝では、滅ぼされた洪武帝時代の規定を冊封関係を加味して自国に適用し、二品以上に亀趺碑を建てさせている。一見中国皇

帝に従順そうに見えて、実際は滅んだ王朝に義理立てする「形」を作り出している。また、清朝時代になると、朝鮮王朝では、上記の規定に加え、墓葬一般に明の最後の皇帝たる崇禎帝の死後何年になるかという年代（崇禎紀元）を刻するにいたった。これも滅んだ王朝に義理だてする「形」である。

朝鮮王朝に先行する高麗王朝では、仏教王国高麗の官僚たる仏僧の位階を問題にした。僧階の五位以上に亀趺碑の立碑を許したのである。この場合、立碑の基準は完全に高麗国内を問題にしている。頂点に立つのは高麗王である。

日本では、大化の薄葬令以後、大型の墓葬も墓前碑もなかった。江戸時代になると、大名たちが大型墓葬を営むにいたったが、それらはみな「お家」の墓葬であり、大名相互に独自性を競い合った。その独自性ある墓葬の一環として、亀趺碑が建てられる。しかし、その際の立碑の規定は、三品以上を何の文句もない建て方ができるものとし、五品以上は仏教寺院のために建てることを名目とするなどの方便を併用するものであった。この場合の品階は、一部は律令官位であり、一般的には武家官位であった。頂点にあるのは日本の天皇である。

大名たちは、亀趺碑を建てることを名目にして「お家とりつぶし」のネタにされることを恐れており、その恐れは東アジア規模で中国皇帝との関わりをも意識するものであった。

自前の律令（日本の武家法を含む）ができあがった後の東アジアを含め、その律令施行域を特別に扱う理念がある。その理念の基礎にあるのは、儒教經典に代表される中華・夷狄観であり、みずからの統治域を中華（に相当する特別地域）と規定する。

しかし、戦国時代の国家ごとの中華・夷狄観は、漢代の周王朝を歴史的に一尊と位置づける中華・夷狄観の下で封印されてわからなくなり、周辺国の自らを一尊と位置づける中華・夷狄観も、中国皇帝の下で編纂された史書の中では一顧だにされていない。無視されたり、一顧だにされないなどの事情はあるが、存在したのは歴史的事実である。

現代世界は、とりえず平等互惠の国家関係があるべき「形」になっている。歴史的に、一尊が複数併存する状況は、事実の裏付けがあるだけでなく、平等互惠を基礎とする現代の「形」に準じて論じ得ようが、特定の国家を一尊とする「形」は、多分に架空の理念を含むだけに、そのままの「形」たりえた方がいいのかどうか、今後さまざまに議論してはいかだろうか。